

た
ら
ち
ね
と
ま
と
子

特259

741



始



特259
701



子

昭和十六年

姊崎正治編



今日乃知
真是仙子

真実の心
今日の本

序言

大學の教授職を退く前年、珍らしくも八年を隔てて外遊、翌年職を退きてより海外に使用すること六連年、途太平洋を横ざること八回、北米大陸、大西洋、印度洋各六回、其間船上車中、閑に乗じて古人の詩を誦し、之を和詠する外、故國を離れては世界の情勢を思ひ、世の紛をぬけ出ては、思を内に潜むることを得、その跡を録して「たびまぐら」七篇に收めぬ、

此間、異郷我子の家に暮らしても、故國家に在りても、年と共に孫等の成長を見ては、老境の慰藉を得、海上山中親々の忌日に逢ひてはその跡をしのび、詠草の十分一は實に此等三世宿縁の思より出でしも

の、辭は整はずとも、己にとりては一に衷情の聲に外ならず、

然るに、我家何の因縁か、由來子實に乏しく、養嗣子に依りて家系を繼承すること數代、予が母は二姉一兄の夭折によりて、残れる末子として、夫を迎へて家を嗣ぎ、而して予はその一子として、早く父を喪ひ、家を嗣ぎてより今方に六十年、且つ幸にも子女五人皆健かに生ひ立ち、退官の次年以來、孫の出生内外に相次ぎ、今や八人を算するに至れり、是れ我家にとりては優曇華の開敷といふべく、獨り己の悦たるのみならず、亡き親々に對しても追薦の一端たるを得んか、

然るに、その間、先祖の年忌に會しつつも、旅中その忱を致す能はざりしこと數回、戰亂の爲に外航の途たえて家に留まる今年、亦年忌二つに會ふ、この八年の間、先祖の年忌を録せんに、

寛政元年八月十九日（陽曆十月七日）

永 正（五世の祖）

昭和十三年百回忌

大正六年三月卅一日

知 永（母そで）

昭和十四年廿三回忌

元文五年八月九日（陽曆九月廿九日）

妙 是 日 院

昭和十四年二百回忌

天保十三年九月三日（陽曆十月六日）

永 見（曾祖父織部）

本年百回忌

寛保二年十一月六日（陽曆十二月二日）

雪岸惠松禪定尼

本年二百回忌

加之、永盛（父正盛）は昨年六十回、證永（祖父勝敬）は今年七十回の

祥忌に當り、而して明年又祖母の五十回忌を迎へんとす、

今茲に、外航中の缺を充たし、又今年年忌の回向微衷を表せんとし、「たびまくら」の中雲波行と、その中間に綴りし閑雲行及片雲行の中より、亡き親と孫子等に關する拙詠を摘録してこの一篇となす、(篇中括弧中の數字は雲波行通篇の頁數、その他は他の二録中)、此を親戚知友に頒つは、聊か追孝の心を遣らん爲なり、

思へば、海を渡り山を越え、國々の間を往返しつつ旅に旅を重ねても、親の故郷あり、孫子の家居あればこそ、漂泊の人たるを免れめ、而してたらちねの親を慕ふ心は、又心の故郷を思慕するの情にして、身の子孫を思ふは、魂の行末を案ずるの心ならでや、親と子と孫と現身の三世に思ひ切なるは、靈の三世相通するしるしならずや、記し來

り、
つて思は過ぎにし歲月と共に長く、情は己が齡を加ふるに随つて切なり、

年月のながれとつきぬたらちねを
したひつ孫子おもふころね

昭和十六年十月十三日

正 治

雲波前記

昭和五年十月五日、亡父の五十年忌を修し、翌六年十月三日、桂宮五十年御墓前祭に参列す、(亡父は明治十四年十月三日宮薨去の翌日、御墓地検分の途に病を獲、五日朝急死)

五十とせはいつしかすぎつ御墓べに
みあとをしたふけふのあつまり

なき父がこの世のなごりとどめにし
このみはかべにいそとせの秋

昭和六、七年

みはかべに苔ふかくむし石さびて

われもむそぢをあゆみきしかな

二

をさなごのかなしき思出くりかへし

君とちちとのみあととふらふ

昭和七年七月、長女三世の海外に行くを送りて、

たらちねを海をへだてて思ふごと

もとつみおやのみこゑわするな

同月、ラヂヨにて祇園囃をききて、

ふるさとのふるきまつりの音をききて

をさなごころにそぞろかへりつ

よひ山のあかりをたどり手をひかれ

母にそひゆくわがすがたみゆ

昭和六、七年

三

雲波、閑雲、片雲抄

昭和八年

九月九日、ケンブリヂに着き、岸本夫婦の寓居に數日をすどす、(一〇)

思出のゆかしき里のここにまた

子らがいへるにいく日おくりつ

十五日、二人に別れてボストンを去る、(一〇)

この里に子らのこしゆくわかれぢに

ところありてや秋雨のふる

二十日、バンクバ着、加地夫婦に迎へられ、一日半を共にして後、東西に別れ行く、(一五)

山をこえ海をわたりてここにあひ

東とにしにまたわかれゆく

人の世のあへばわかるる常ながら

へだたればこそおもひながけれ

昭和八年

昭和九年

四月、退職の後、九州に旅せし折、満洲なる妻の姪貞子重病の報至る、
親の心を思ひやり、太子御筆「今日乃知眞是佛子」の寫しを與ふ、

やめる子をおもふにつれて我も子の
もとつみおやをわすれざらまし

今にして親のころをしる我の
ほとけのみことしりそめにけん

六

五月二日、九州よりの歸途、先塋の側に泊して、

ふるさとに一夜あかしし夢のうちに
見したらちねのすがたおはまし

六月十五日、北太平洋航行中、夢に父母を見る、(二七—二八)

父ゆきしをさなごころのかなしさを
六十ぢのたびの夢にまたみる

なきからの父のみそばにたちちねの
母のみすがたゆめにみえけり

昭和九年

七

わが子らもわがなきあとになき父を
ゆめぢにしたふころしるらん

六月廿二日、モントリオールよりボストンに向ふ車中、(三七)

いくちさとふるさととほくはなれても
子らにあふ日のけふのいそしみ

思出のふかきまなびのふるさとに

友もゐるなり子らもまつらん

七月上旬、大西洋航行中、多く往事を夢みし中に、(四一)

母の友むかしの人をゆめにみて

親子ふたよをかたりあひけり

七月九日、ハーブルに上陸すべき日、岸本夫婦は船にのこりて
直にロンドンに向ふ、(四四)

親と子のおなじふなぢの今さらに

わかれゆくべきけふはきにけり

わが子らを船にのこしてわかれゆく
たびのうちにもまたたびにたつ

七月廿三日、パリよりロンドンに着き、子等に迎へられて、
加地がシャアレイの家に入る、(五三)

ここにきて子らがむかへにほほゑみつ
むかしゆかしきシチをみるかな

わが子らの家に夕げのはつつどひ

サレイの岡にゆふひてりそふ

七月廿五日、己が誕辰、岸本加地二家の子らと共にホテルにて夕食(五四)

子らとともにこの日むかへてこの園に
ながむる月のまどかにぞてる

おもひきや六十とせあまる思出の
けふをかくこそおくらめやとは

廿六日、岸本夫婦船出、加地夫婦は船渠に見送る間、獨り家に居て(五五)

わが子らは水のうへにてながむらん
ふるさとのかたいづるこの月

はらからのあひては又もわかれゆく
こころのあはれおもひこそやれ

波もたち風もふくらんふなぢには
親のふるさとおもひつつゆけ

八月一日、加地夫婦結婚の一周年、(五七)

こぞのけふちぎりし子らの思出を
ここの家ゐにかたるうれしさ

八月廿四日、船出、ときは家に留まりてわかれを告ぐ、(六六)

おくる子とわかれゆく父ことばなく
すすむくるまのあとかへりみつ

廿九日ジブラルタルを出で、翌卅日母の命日速夜、(七〇)

なき母をおもふ夜ごとの夢ぢにぞ
こころのおくをさぐりぬるかな

夢ながらもとつみおやのみ心を
あふぎつ守るみち見つるかな

十月五日神戸上陸、京都に泊す、此日恰も父の祥忌、(九七)

國ぐにをめぐりてここにふるさとの
親のみはかべ子はかへりきぬ

昭和九年

五十とせのむかしのこの日しのぶかな
父うしなひしをさなごころを

八日家に歸りつけば、ロンドンより無線電信、孫出生、
すみと命名と報じ来る、(九八)

海こえて家にかへればそらの波

孫うまれぬとあとおひてきつ

十二月七日、三世男子分娩、正覺前一日にちなみて正一と命名、

孫うまれいそぐ車に秋びより

昭和十年

三月、ますと共に旅出、(一〇〇)

初孫のかほ見に春の海萬里

ぢいとばあとの帆をあげてゆく

十七日横濱出航、名古屋上陸、十九日京都先塲に詣づ、(一〇二)

みはかべにわかれをつげて旅にたつ

我もいつかはやすらはんここ

廿九日香港船出、翌日は母の祥忌速夜、(一〇五)

たらちねの思出とほくみはかべの

花のいまごろしのぶけふかな

野べおくり御寺のさくらさきいでし

むかしおもひて年かぞへみつ

五月二日、シャアレイの家に着く、(一三四)

海こえて初孫みるや若葉かけ

ぢいとばあとに春風のふく

みどり子のゑがほを見てはそぞろにも

よたりのおやのゑみはゆるかな

シャアレイの家に春日閑なり、(一三五)

鳥の歌ききてまどろむしづけさを

をりをりやぶる孫のなきごゑ

大荷物到着、荷解にぎはふ、(一三五)

みどり子へうからやからのおくり物

ならべたてては親のよろこぶ

五月六日此國の祝典、庭園にてラヂヨをきき、
又森に蕨をつむ、(一三六)

草のうへ花さくなかにみどり子を
すえてながむる親のゑみがほ

このよき日親子よたりのたのしくも
若葉のもりにわらびつみする

七日朝、(一三七)

鳥の聲ききてめさめつ孫のこゑ
ききておきづる朝のさやけさ

九日、あすは大陸に旅立をとて、(一三八)

朝夕にみるみどり子のゑみがほに
はなれてしばしたびにたつかな

十日旅出、(一三八)

妻に子にまごにわかれをつけてゆく
しばしながらもたびにぞありける

ノルエより歸りて、月の下旬、家居靜に、
孫を見て心なぐさむ、(一六〇—六一)

みどり子のねがほゑがほを見まもれば
きのふもたびもわすれはてけり

みどり子のめさむる聲は鳥ととも

あけほのの歌あさのはえのうた

みどり子の指すひながらねむり入り

いきのみそらにかよふしづけさ

六月六日、祖母四十二年の祥忌、(一六三)

四十とせはやくもすぎてなきうばの

いつよのすゑの孫うちみやる

七日、パリへ旅立、(一六四)

母ともかどでをおくるみどりごの

ゑがほを心にきざみてぞゆく

北フランス車中、(一六五)

みどり子のさけぶをきくと夢さめて

孫のねがほをおもひこそやれ

廿六日、鳥船にてベルリンより歸る、(一八五)

みどり子がしばしのほどにおとなびて

ひとを見つむるまなこすずしき

昭和十年

七月上旬、快晴つよく、日に孫を見守る、(二八六―八七)

たのしげにひとりゑみてはみどり子の

まはらぬ舌になにごとかいふ

いくたびかつとめつとめてこころみつ

ちからをこむるみどり子のわざ

まなこをばとちてはひらき又とちて

つひにしづけくねむるみどり子

何おもひかんがへてやらんみどりごの
しばししづかにひとりほほゑむ

手も足もほほのおもをもうごかして

あらはすころうごきなもの

虫のとび戸ばりのゆるぎちる烟

見まもるまなこやすむひまなき

たのしげに見まはしつつも手をあげて
けふりにふるる手ぶりをかしき

わが歌のなるにまかせて口ずさむ
聲にいらへてみどり子のゑむ

九日、鳥船にて再びパリへ、(二八八)
けふもまた孫の手をあげみおくるに
こころのこしてわかれつげゆく

七月下旬、ジネバヨリ歸り、フェリングの田舎家に入り、
園生に孫を見守る、(二〇四—五)
みどり子のなつかしげにも人を見て
こころのかけをうつすまなざし

見まもりつうちみまはしつみどりごの
うごくこころのうかぶまなざし

みどり子のさめてはゑみつ又ねむる
ゆめはこてふの花をやめぐる

青ぐさをしとねにいねてねむりいる
夢あをぞらにはせかよふらん

みどり子のねがほ見まもる時のまは
われをも世をもわすれはてけり

七月廿五日、己が誕辰、親子四人海岸のホテルに遊ぶ、(二〇五)
年どしにむかふるこの日親と子の

なぎさながめてともにくらしつ

八月一日、二年前とかが結婚の日、(二〇七)
にひ妻のふたとせすぎて若き母

みどり子いあくすがたやさしき

五日、すみ初めてはひ進む、(二〇八)
みどり子のとつきになりてはひすすみ
よろこぶまなこなにめざすらん

ゆくゆくは世にたちゆかんとはじめに
はひもすすみていさむみどり子

八月下旬、静居のうちに、(二一四)

枕べのおもちや人形かずかずの
友をや夢にみてねむるらん

口のみか鼻うごめかしみどり子の
ものいふこころ何おもふらん

いつもいつもうれしみいさみはひまはり
のびのびおふる身とところかな

二八

手と足のやや思ふままはこびては
たえずころみうごくみどり子

孫の成長日に著し、(二二二二—二二三)

くちびるにはあとまあとをいひそめて
ところはしらでたれをよぶらん

唇につぎてのどにもおとせんと

つとむるまでに孫おひたちぬ

みどり子のまづいひそめしことのはは
はあとイエスのふたつなりけり

しほの味はじめてなめてうれしきか
もろでをあげてばんざいのかた

關の戸をつくりてまもるおや心
おもひもおこせおひたちちのち

昭和十年

二九

こども歌ヂスクになるをききつつも
しらべにあはせもろでをぞふる

みどり子の何おもひてやたちまちに
のどをならしてわらひささめく

しづけくもねいきかよひてやすらへる
まごとおなじくわれいねんかな

九月中旬、出發の時近づく、(三二五)

足はこびならひそめては丸づくゑ
つたひてあゆみいさむみどり子

すこやかに言葉ならひてこん春は
ぢぢとよびてぞ我をむかへよ

みどり子のうつしゑみてはふるさとの
まだみぬうからいかにゑむらん

昭和十年

海こえてもたらしかへるうつしを

見つつたのしくながぢゆかなん

子に孫にあひて日かずをかさねても

わかればいつもつらくこそあれ

親と子のあひつわかれて東にし

いでいる日にもおもひうかべん

秋ひとよるりのたきびかこみつつ

親子よたりのわかれをしみつ

廿三日、別れの日終に来る、(二二六)

むかへてはよろこぶ子らの見おくるを

こころくみつつわかれゆくおや

いつ月はいつしかすぎて朝な夕な

なれしまごにもわかるべきけふ

午後、鳥船クロイドンを發す、(二二七)

鳥船をなにとおもふか孫が手を

ふるにいらへてそらに去りゆく

昭和十年

廿六日、マルセイユ船出、(二三一―三二)

船出してふるさとのそらのぞみつつ
さりにしあとの孫をこそおもへ

ひがし西ところはふたつ身はひとつ
子らと孫らにおもひかよひつ

船のねや孫のうつしゑとりいだし
ともにおいらくのさち思ふかな

廿八日、ナポリにてロンドンよりの書信に接す、(二三三)

去りしあとしたひて孫がむづかりし
たよりをみてはとびもゆかまし

東地中海、碧水をながめて、(二三四)

朝ごとにしのぶ芝生のあさひかけ
まごともなひて見つるくさ花

十月八日、すみ誕生日、アラビヤ海にて、(二三七)

わが孫はよはひかさねてこのよき日
庭のしばふにあゆみあるらん

廿八日、神戸上陸、京都に泊し、翌日先塋に詣り、(二四五)

海こえてかへるふるさと年ごとに

みはかに親のあとしのぶかな

昭和十一年

二月上旬、孫正一を見て、

くるごとにたちることばのおひまさる

まごにわがやのはえまさるかな

二月廿二日、ロンドンより電報、男児出産、幸雄と命名すと、

春の雪けたてて幸雄うまれけり

名はゆきをうまれししるし春の雪

アルピヨの雪の中から桃太郎

こちらにひびくたかきうぶ聲

四月八日、嫡孫生る、所行讀の佛誕偈にちなみて正平と命名、

みほとけの世にあれましし春の日の

風にあはせてまごのうぶごゑ

昭和十一年

廿五日、正平産院より家に入る、

わが孫のけふぞはじめてわが家に
かへりてねやにあぐる初聲

何ものかながむるがごとみどりごの
見はるまなこを親のみまもる

五月の進むと共に正平の成長しるし、

みどり子のほほもふくらみまなざしの
うごきにしめすおひたちのほど

六月四日船出、越えて二日、北太平洋上、祖母の祥忌、(二四九)

四十とせのむかしのこの日しのびつつ
うなばらはるにおもふみはかべ

ペンタペ上陸の日近づく、(二五〇)

ひがしにし子らと孫らをおもひつつ
ゆくもかへるもたのしわが旅

十五日上陸、舊知のホテルに入る、(二五一)

ここにきてわが子にあひしふたとせに
ちかきむかしのゆかしくもこそ

昭和十一年

廿九日、ロウレンス入江を出でて大西洋に進む、(二六六)

波の上ねむりにつけばひがし西

まごのゑがほをまぼろしにみる

七月三日、上陸の前夜、(二六七)

波の上こよひひとよの夢さめて

あすは孫子のゑがほみんかな

四日、プリマウス上陸、迎へられてシャアレイの家に入る、(二六八)

山に海ちさとのたびの月をへて

ここのそのふに孫を見るかな

いつしかにこぞのみどりご姉さまに

なりてべいイをなでついたはる

いづれともことばに國のさかひなく

ものいひならふ孫のをかしき

七月廿一日、パリより歸りて、(二八一)

そらとぶもかへるも家居のあればこそ

いへにはまごのゑみてむかふる

廿五日己が誕辰、静居、(二八三)

生れきてここにむそとせみつあまり

世のひがしにしみつるものかな

四二

たらちねをしたふ心ぞいやまさる

あを生みまししけふのこの日に

わが孫が母をばしたふさまをみて
思ふは我もかくありしころ

八月上旬、舌の手術の爲にロンドン大學病院に入る、(二八六)

おもはずも子らにはなれつひとりゐて

おもひはめぐるひがしまたにし

中旬、病院より家に歸りて後、(二八七)

キオリネの耳に入りてやみどり子は

なくねとどめて何かささやく (幸雄)

八月廿九日、船にのらんとて、加地夫婦に送られて家を出づ、
途中霧こめて車進まず、(二八九)

霧のなかはする車に身をまかせ

わかれををしむ心やるかな

昭和十一年

四三

十月八日、すみの誕辰、航海中千島沖より
北海道なる祖母に電報、(三〇七)

生れきてけふぞふたとせわが孫が
たちることばを思ひこそやれ

十日横濱上陸、正一出で迎へ、正平は家にて待てり、(三〇八)

ひがし西ゆくもかへるもさちはえて
孫のゑがほにむかへられつつ

昭和十二年

元旦、正平の初正月、

初孫のはつ正月やまきゑ膳

正平は初正月に師子吼かな

四月七日、種世結婚、市内櫻花方に盛なり、

花にほふけふをかどでの妹とせが
ゆくてまことのみをむすべかし

昭和十二年

九日夜半過、ラヂヨにて「神風」がクロイドンに着く
状況をきゝて孫等を思ふ、

日の丸のはたをかざして神風を

むかふる孫らおもひみるかな

廿一日、ラヂヨにて「神風」の羽田歸着を傳へ、孫正平は手をふりあぐ、
神風のよろこびしるやみどり子も
もろでをあげてばんざいのかた

五月下旬船出、香港を出でて翌日、海上にて祖母の祥忌、(三一五)
年ごとにしのぶこの日をひがし西
くがになみぢにかさねきしかな

支那南海にて、(三一六)

わが孫のおもかげ夢にゆききして
おもひぞはする東またにし

七月十日、パリ會議中、土曜日孫らを見ん爲そらをとびゆく、(三三八)

しばらくは土をはなる身とともに
こころはそらをとびもゆくかな

空はせてゆくてを思ふまご子らが
もろ手をあげていでてむかへん

昭和十二年

七月下旬、パリより家に歸りて静閑の裏に孫等を見る、(三五四)

あかつきの夢は孫らのこゑにさめ

きのふにかはる森のとりきく

いとし子がとつぎて四とせ今ははや

ふたりの子らの母となるみる

おもふこといはんとすらん何ごとか

口にまかせてかたるみどり子

子供うたヂスクにつれて手をふりつ

口うごかしてをどるをかしさ

孫すみ、月の晝を見てボールと呼ぶ、依て一夜、月を見するに、
感嘆眼をはる、(三五七)

みどり子が始めて見つる月かげの

すむをところに世をおくれかし

八月廿一日船出、(三五八)

わかれゆくあとに孫子をおもひやる

春ころにまたも見ましと

昭和十二年

巨船ノルマンデー船中最初の朝、(三五九)

みどり子の聲にめざめし朝ごとの
きのふにかはる船のたびかな

太平洋上、九月廿三日、上陸の前日、(三七七―七八)

まご子らのゑがほを思ふわが船の
つくべき岸にむれるるなかに

ふるさとかへりつく日のいそしみを
おもへばたびのうきかひはあり

十月十日、孫正平歩行進みて喜ぶ、

たつちしてあいよができるうれしさに
足もとみずにあるくみどり子

昭和十三年

五月中旬船出、先づ臺灣に向ふ、(三八二)

ひがしにし心はまごにひかれつつ
身は波のうへゆききするかな

昭和十三年

西印度洋上、六月六日、祖母の祥忌、(三九四)

年ごとの船ぢにこの日しのぶかな

むかしのわれのおもひあらたに

はるけくもみはかべを思ふふるさとは

ももちよろづの波のかなたと

七月一日、鳥船プラーハよりクロイドンに着く、(四三一)

鳥船の土につきては人かげの

むらがるなかに孫らまづみゆ

ぢいちゃんをむかへにきつる孫ふたり

もろでにかかへ我わすれけり

暫くシャアレイの家に静居、(四三二—三四)

鳥のうた孫らの聲にめはさめて

こころいそしむ朝ごとのわれ

思ふままふたつのことばけぢめなく

かたりつわらひたはむるる子ら

をりをりはいさかひつつも青芝に

あそぶ孫らを見てはほほゑむ

たはむれつさやぎつ笑ふと見るうちに

いさかひさけぶをさなごのむれ

をさなごがふしどにいりてひとりごと

何をおもひてなにかたるらん

手にまかせ品じなとりてこれは何

あれはなにぞとをさなごのとふ

をさなごの何みまもるか草花の

あひだにたちてしばし聲なき (幸雄)

龜のこを見てはかたらふをさなごは

これを友としなじみみるにや (幸雄)

七月八日、パリに向けて出発、(四三五)

あすよりは孫らの聲をきかぬあさ

むかへていかにさびしかるらん

二十日、鳥船にてツューリヒより歸る、(四六二)

かへりきて孫のなく聲きくときは
しばしわかれてゐしとしるかな

廿五日、己が六十五回の誕辰、(四六三)

けふもまた孫らの聲にめはさめて
みどり子なりしわれ思ふかな

むそとせに五つくはへてわがあれし
この日はるかにしのぶたらちね

白ゆりをささげて母のすがたゑに

たむくるわれやけふはをさな子

をさなごのわれをのこしてさりましし
父をぞさらにしのぶけふかな

八月上旬、張鼓峰事件の報傳はる中にも、
孫らを見ては心稍寛ぶ、(四六五―六六)

手車にのせてめぐりしみどり子が
今はみつわのくるまのりゆく

はらからのふたりながらもおのがじし
さがのしるしのしるくもあるかな

をさな子がなきつさけぶをいまして
うつもなさけのおやごころかな

もてあそぶはものに指をきりながら

なきもさけばぬこの子たまあり (幸雄)

あまばれに子らが芝生にさざめくを
ききつつ文をのどけくぞよむ

八月中旬、静居の中に、(四六八)

なきさけぶ子らかなしきか老いてのち

なきえぬかなしみあるをしらなん

をさな子が心みたねばなきさけぶ

そのあらぶれににたる國ぐに

月末出發近づく、(四七一)

まごの聲とりのなくねもいまいくひ

海にうかばばきくべくもなき

九月二日、乗船して孫子に別る、(四七二)

孫子らはさりてわがかげさびしくも
夕日をうけてふなばたにたつ

五日、ビスカヤ海上にて父の命日、(四七三)

なき父のみかほほのみえききし聲
かすかにきえてはかなきぞ夢

十日、マルセイユ碇泊中、ロンドンよりの書信に寫眞を封じ来る(四七五)

まご子らがすがたゑみてはその口に
ものいふ聲をおもひやるかな

中旬、地中海、艸山集の和詠進む、(四七八)

君が歌よむにつれてはふるさとと
をさなきころの我しのぶかな

ふるさとをしのぶにつれてなき親を
したふところのながくはるけき

なき親のみはかとともに竹おふる
君がおくつきおもひこそやれ

十月五日、東印度洋上、父の五十七年祥忌、(四八八)

むそとせにちかきむかしもきのふかと
父さりまししその日をぞおもふ

七日、ボンベイ出航、翌日すみの誕辰、(四九〇)

秋日さすそのの芝生にわが孫は
うまれしこの日ことほぎるらん

十九日神戸上陸、翌日先塋に詣づ、(四九八)

ふるさとの親のみはかべたちつくし
おもひはめぐるむそとせのあと

かへりきてわがふるさとの土ふみつ

おもふははてのふるさといづこ

十一月六日、小湧谷に秋を賞する夕、三世の二男出生を報じ来る、

もみぢばにくれゆく山は音なきも

まごのうぶ聲はるかにぞきく

昭和十四年

正月初三日、艸山孝心篇を編す、

たらちねにつくすまことの歌とふみ

おのづからにもまごころの聲

昭和十四年

艸山のゆかしきかをりつみあつめ
わがなき親にたむけまつらん

八日、孫正平葉山より家に來る、

なにごとをかたるか孫の聲きこゆ
日ましにことばさはになりつつ

三月十八日、翌日出航の吾妻丸に乗込む、(四九九)

孫子らのさりにしあとに船のうへ
ゆくてを思ふ夕まぐれかな

三月卅日、北太平洋上、母の廿三回忌速夜、(五〇二一四)

春ながらなげきのよるのあけそめし
おもひでのけふそらしらみゆく

たらちねのこのよのわかれ年とともに
おもふところのまさりゆくかな

たらちねがいのちのよはひ我もまた
かさねていよよしのぶけふかな

ふたそとせ三つの春日のかへるけふ

なみぢはるかにおもふみはかべ

たらちねのはぐくみうけしをさなごの

今はよはひのほどをこそおもへ

おいなみの我もむかしはをさなごの

ころをいまにおもひかへしつ

孫子らはつどひてこの日まもるらん

おやをば思ふころひとつに

なき母のおもひでさらにふかきけふ

よみてはなみだ艸山のしふ

四月八日、東太平洋上、孫正平を思ふ、(五〇八)

花のくもたなびくころのふるさとに

よはひましゆく孫をこそおもへ

廿五日、シャアレイの家に入る、春なほ浅きも
門前の櫻さき出でたり、(五一八)

とつくにも孫子のすまふ家のかど

ふるさとにてさくらさくなり

夕、閑談しめやかなり、(五一八)

すぎてきし八重のしほぢも夢のあと

ゆふべのまとりまごころととも

廿六日、荷物到着、子供等荷解にいさみよることぶ、(五一八)

もたらししおもちや人形かずかずの

つつみはこびていさむをさな子

シャアレイの早春、(五二〇)

鳥のうた孫らの聲にめはさめて

あさなあさなのはえわたるかな

五月祭に鯉のぼりをたつ、(五二〇)

こひのぼりいつ色のぼりあをぞらに

なびくにつれてをどるをさな子

六月一日、オクスフォードよりブル入江の江濱村莊に歸れば、
孫等出で迎へ、すみはちいちゃんを夢みしと語る、(五三〇)

ぢいちゃんがゆきにし方はいづこぞと

ゆめみしといふいとわがまご

六日、江濱村莊にて祖母祥忌、(五三一)

いそとせにちかきむかしをしのぶかな

いり日のそらにおもひはせつつ

わがたまに光もあらばなきうばの
たまものところそいよよみがかめ

七〇

江濱村莊に夏日さし、孫等は家に團に樂しげにくらす、(五三三)

いさかひつさけびつともにはらからの
かくておいたつをさなごふたり

をさなごが手をあはせてはおのづから
となふるこゑはこんしさんがい

七月四日、鳥船バリに向ふ、(五四二)

まご子らのみおくるすがたつかのまに
はるかにひくくわれ雲のうへ

九日、鳥船クロイドンに歸着、(五五五)

そらよりは孫子のすがたながめつつ
くだるとりふね土につきけり

廿五日、己が誕辰、(五五七―五九)

西山のあとをしのびつ艸山の
歌におもひのふかきけふかな

昭和十四年

七一

あれいでて何さけびけんわが聲の
けふはみのりのふみをよむなり

ことしまた母にささぐる白百合の
にほふがなかにおくるけふかな

六十とせのむかしは我もたらちねの
むねによりつつゑみしみどりご

人の世の風すひそめてむそとせに
あまるむとせのけふのわれかな

うまれきてすぎにし年をかぞへみる
ふるさととほくおもひはるけく

むそとせはかぞへてながき時ながら
いつとはなしにすぎしつかのま

まごふたりたばこもたらしぢいちゃんか
うまれしけふをいはふとぞいふ

いとしも孫をながめておもふかな
われうまれずばまごもうまれじ

父といひぢぢとよばれてけふはまた
われも生まれしその日をぞおもふ

生まれしは何のためともしらざりき
しにゆくきははこれとしらまし

八月下旬、戦争の危機日に募る、(五六五)

この園にまごとあそぶも今いく日
いくさのあらしふきすさぶまで

九月一日、戦機愈よ迫る、(五六八)

人の世のすさびをしらぬをさなごは
犬にたはぶれわらひさざめく

二日、おき出づれば、ロンドンの空 Balloon barrage
充ちて壯觀、子等喜び見る、(五七〇)

雲をつくそらのうき舟かずしれず
つらなる見ては子らのよろこぶ

四日早昧空襲警報、晝は快晴、孫等は風船を眺めて喜ぶ、(五七二)

やすからぬ思ひのまにもをさなごが
ゑがほをみてはわれもほほゑむ

六日、幸一が父の十三回忌、(五七四)
なき父をしたふ心をおもひやる

わがなきあとに子らもかくやと

八日、避難の爲、再び江濱村莊に入る、(五七六)

をさな子は何のためともしらぬまま

ただいでゆくにいさみよろこぶ

九月末、冷氣加はり、夕毎に爐火を點し、

孫等の集めし松かさを焚く、(五八九)

をさなごがあつめし松かさもえたつを

ながめつつだふ夜は冬にて

十月十日、避難船リバプール船出、

幸一はロンドンに留る爲に別を告ぐ、(五九二)

またあふをいつともしらでをさな子は

父にわかれをつけていさみつ

航海第一夜、危険区域にあり、(五九三)

のりいづる八重のしほぢは孫子らと

ともにいへぢをいそぐたびかな

とつくにに生れし子らもたらちねの

ふるさとみんといさみたつなり

十一月五日、メシコ海上、種世長女の出産を報じ来る、
妙種尼の名と菊花の妙香とをつらねて、たへと命名、(六〇二)

名もたへよたへのかをりの菊につれ

うぶ聲はたかくも菊の香にきほひ

たへのみのりをよびもとなへよ

十日、種世の誕辰、(六〇三)

おのが子をながめやりつつおのれまた

うまれしむかしのこの日しのぶか

親となりおのがうまれし日をけふぞ

むかふる庭にきくかをるらん

十一月下旬、北太平洋に波高し、(六〇七)

わらべらがたはむれさけび又なきつ

ひねもす船のさわぎにぎはふ

十二月一日、あすは上陸の日となる、(六〇八)

をさなごが心にいかにゑがくらん

あすはみるべき親のふるさと

二日朝横濱上陸、京の孫等來り迎へ、いとこ等始めて相見る、(六〇九)
わがまごのはじめてあへるいとこらの
むつびあそぶをみるぞうれしき

昭和十五年

四月八日、正平の誕辰、片瀬の家に誕生佛を齎らして、
うぶ聲の此日ぞたてよ花御堂

四月廿日、とき男兒分娩、弘世と命名、
たらちねの帯にひそみつ海ふたつ
こえきてここにあげしうぶ聲

ひろき世の潮ぢをすぎて日のもとの
春にあれきし弘世よき子よ

九月中旬以後、ロンドン空襲の報頻なり、幸一を思ふ、
そらをつきもゆるほのほのただ中に
ひるまずたてるわが子をぞおもふ

廿三日彼岸の中日、孫子等集ふ、
まご子らのつどひあつまる彼岸のけふ
おやのみたまもともにきまさん

十月五日、亡父六十回の祥忌、孫子ら集まりて勤行、

むそとせのむかししたはし悲みの

この日ながらもおもひかへせば

なき父をしたふおもひのはるけくも

まご子あつめてこの日ゆかしき

父ゆきしその日の我といまのわれ

つなぐはながきむそとせのおもひ

十月八日、すみが日本に於ける最初の誕辰、

うまれきてむとせのけふぞ日の本に

むかふるこの日わすれざらまし

廿一日、京都先塋に詣づ、

なき父の舍利をささげてみはかべに

たちしむかしはをさなごの我

十一月上旬、艸山孝心集改訂稿成る、

親をおもふまことのかよふ人ごころ

ともにほとけのみことこそしれ

十二月一日、金吾入替、太子御筆寫を興ふ、

海わたり山をよぎりつものふの

ゆくべき道をふみつくしこよ

十日、金吾船出、其夜月明、

風に波あらふるうみも人の世の

すがたとみつつしのぎこえゆけ

船のうへそらすむ月をながむらん

うなばらとほくおやを思ひて

年末、艸山孝心篇校正、

年かはるこよひのそらに深艸の

みもとの竹をおもひやるかな

たらちねにつかへつ年をおくりにし

かすみがたにの人しのぶかな

ラヂョ京洛の除夜鐘を傳ふ、

鐘の音におもひぞしのぶふるさとの

おやのみはかべさゆる冬の夜

昭和十五年

昭和十六年

八六

三月卅日、母の祥忌遠夜、孫子等集ふ、

ことしまた孫子つどひてたらちねの

みすがたをがむけふぞゆかしき

ひまごらがたむけにつどひ年ごとに

おひたつさまをあはれみそなはせ

四月十六日、京都展墓、墓邊の草茂るを刈りつつも、
母の姿をおもひうかぶ、

みはかべに草をなぎつつおもひうかぶ

おなじきわざのありしみすがた

十七日、京都よりの歸途、ときが子等を伴ひて
伊豆山に在るを訪ふ、すみ特に喜び迎ふ、

旅はててむかふる孫をみるおもひ

海のひがしも西もおなじき

昭和十六年

八七

五月廿四日京都に赴く、着すれば正見の長女出産を報じ来る、
佛國品にちなみて、くにと命名、

生れきて國を名におふうまし子の
やすくおひたて國もろともに

六月六日、雨中妙高池ノ平に宿して、

海のうへこの日しのびし思出を

たどる山べの雨のやどりが

七月廿五日、己が誕辰、孫等來り集る、

ぢいちゃんもむかしのけふは赤ちやんと

かたれば孫ら目をはりてみる

北海道の加地祖母に見せんとて、すみと幸雄とを伴ひて、

七月卅日出發、八月二日靜内につく、

かくまでに孫おひたちぬとふるさとの

祖母にみせてはむねせまるかな

次の日、一家擧げて加地先塋に詣づ、

霧こむるのべのみはかに水そそぐ

まごらの心みたまくみませ

九月九日、ロンドン在留邦人引揚の爲に船を遣るとの報、
幸一が心を思ひやる、

ふるさとへかへるたつきの船こんと
いさむかなたを思ひこそやれ

よろこびはこなたもおなじ歸りこん
船のたよりにいさむわが子の

十月三日京都に赴き、四日墓参、

みはかべに秋のひかりをあびつつも
時のへだてもわすれてぞたつ

午後源暑、夕大雨、宿に静居してありし昔を思ふ、

まよなかにゆりもおこされいきしにの
さかひにたてる父をみしとき

一夜へて父なき子ぞとおのが身を
おもひみしよりむそとせのけふ

なき父をしたふ心はをさな子の
むかしもおいの今もかはらず

親をおもふ心はゆめにゆききして
うつつとさかひのわかぬ我かな

五日父の祥忌に曾祖父百回忌の逮夜をかねて墓参、
午前十時、恰も父が最期の時刻、

父ゆきしその時いまぞとみはかべに
たちてはむかし目にうかぶかな

折ごとにおもひうかぶる故里の

親のみはかべ去りもかねつつ

九日、家に歸れば、孫くに生後初めて來り泊す、

今さらにめづらしげにもみどり子の
なく聲をきくねざめたのしき

昭和十六年十二月二十日印刷納本
昭和十六年十二月二十五日發行

(非賣品)

東京市小石川區白山御殿町一七

著作人兼
姉崎正治

東京市麻布區市兵衛町二ノ六一

印刷人
秋本宗市

東京市麻布區市兵衛町二ノ六一

印刷所
株式会社ヘラルド社

404
442

終

